

本への誘い

2022年2月1日

学長 田林 暁一

最近、「1日の読書時間は0」という大学生の割合が5割を超えたというニュースがあり、この調査は全国大学生協連による「第53回学生生活実態調査」で全国の国公立・私立30大学の学生1万人からの回答結果であった。半数を超えたのは読書時間の項目が調査に加わって初めての結果で、書籍費も減少傾向にあるようである。本を読むという事は、何か志を与えてくれる様な感じを持つ事があったり、自分の知らない世界を覗かせてくれたり、何か人に興奮を与え、また現代の人が忘れかけている様な人に対する思いやり等を思い出させてくれる様な気がし、また、読書はその事によって役に立てようなどという気持ちがなく読んで、十分楽しいし、ふと気がつくとなかなかよりは人間に対する目が開かれた感じがする。そして、感動した本を繰り返し読むという事も良い事で、それによって脳細胞が微妙に変わり、本を読むことに対する趣味が作られ、読書はこのように人間に対する目を開かせ、広い世界を自分の目の前に見せてくれる働きを持つ。いわゆる教科書で歴史を読んでもそれだけでは実感として迫らないものであるし、あまり参考にならないというのが私の実感である。一方、伝記や英雄伝、そういうものを読むとその英雄の周りに動く人々、社会、それらがいきいきわかるようになり、だから、東洋であれ、日本であれ、あるいは西洋であれ、その世界をわかろうとする具体的なアプローチとして通俗に近い物語を読むことを薦めたい。学校教育に何が必要かという質問に長く教育に携わってきた方々が「一に国語、二に国語、三、四がなく五に算数」、また「一に読解、二に読解、三、四は遊びで、五に算数」と回答されていたが、特に読解力は重要とされている。読解力の改善には精読、深読が良いとされているが、多読でも良い様に思える。読解力が十分備わっていないと、講義で有用とされているアクティブラーニングも「絵にかいた餅」になるとも言われている。また、詩人・小説家の島崎藤村は「人の世に三智がある 学んで得る智、人と交って得る智、みずからの体験によって得る智がそれである」という言葉を残している。その中の「学んで得る智」は本を読んだり、話を聞いたりして得る知に結びつくように思われる。

上述のようなことから、本学では初めての試みである「読書感想文コンクール」を企画して、今年度からスタートした。今後の活性化を期待して止まない。